

小さな草と太陽

小川未明

青空文庫

垣根かきねの内側うちがわに、小さな一本ほんの草くさが芽めを出だしました。ちようど、そのときは、春はるの初めはじのころでありました。いろいろの花はなが、日にまし、つぼみがふくらんできて、咲さきかけていた時分じぶんであります。

垣根かきねの際は、長い冬ふゆの間あいだは、ほとんど毎朝まいあさのように霜柱しもぼしらが立たつて、その地ちは凍こっていました。寒い、寒い天気てんきの日ひなどは、朝あさから晩ばんまで、その霜柱しもぼしらが解とけずに、ちようど六方石ぼっせきのように、また塩しおの結晶けつしょうしたように、美しく光ひかつていゝことがありました。そのそばに生はえている青木あおきの葉はが黒くろずんで、やはり霜柱しもぼしらのためために傷いたんで葉ははだらりと垂たれて、力ちからなく下したを向むいて

いるのでありました。

けれど、春はるになりますと、いつしか霜しも柱ばしらが立たたなくなりました。そして、一時じは、ふくれあがつて、痛いた々いたしそうに見みえた土つちまでが、しっとり湿しめっておちついていました。元げん氣きのなかつた、憂ゆう鬱うつな青木あおきの葉はも青あおい空そらをながめるように、頭あたまをもたげました。赤あかい実みまでがいあきあきあして、ちようど、さんごの珠たまのように、つやつやく輝かがやいて見みえたのです。

そのころのことでありました。垣かき根ねの内うち側がわに、小ちいさな一本ぼんの草くさが芽めを出だしました。草くさは、この世よに生うまれたけれど、まだ時じ節せつが早はやかつたものか、寒さむくて、寒さむくて、毎まい日にち震ふるえていなければなりませんでした。

そのはずで、いくら、木々のつぼみはふくらんできましても、この垣根の内側には、暖かな太陽が終日照らすことがなかつたからであります。

「ああ、いつになったら、お日さまが私を暖めてくださるだろう。」と、草はつぶやいていました。

すると、この言葉を聞きつけた青木は、

「我慢をしろ、我慢をしろ、俺などは去年の秋から、日に当たらずにいるのだ。それでも黙って不平をいわないじゃないか、我慢をしろ、我慢をしろ。」といいました。

草はこういわれると、小さな頭を上げました。

「だって、おまえさんは大きいじゃないか、だから我慢もされよ

うが、私はこんなに小さいのだ。」と、うらめしそうにいいました。

けれど、もう青木の木はなんとも答えませんでした。そして、黙っていました。

草は、昼間は、まだ我慢もできましたけれど、夜中になりまして、寒くて、寒くて、震えていました。そして、自分ながら枯れてしまわないかと、心配したほどでありました。

そのうちに、日はたちました。小鳥がさえずって、頭の上の高空を飛んでゆくのを、たびたび聞きました。

「いつになったらお日さまは、私を照らしてくださいさるだろう。」と、草はつぶやいていました。

ある朝、草は、まぶしい光が、青木の葉にさしているのを見つ
 けました。なんとという美しい光だろう。草は驚いて、その黄金の
 溶けて流れたような光線を見ていますと、やがてその光は、赤
 い青木の実に燃えつきました。すると、さんごの珠のような実は、
 すきとおって見えるように、美しかったです。草は、ただ、あ、
 あ、とため息をもらしているばかりでした。

けれど、それから、草に日の当たるまでには、また幾日か間
 がありました。ある日、草は、今日はばかに夜が早く明けたなど
 思つて、目を開きますと、長い間待ちこがれた太陽の光が、は
 や幾分か自分の体に当たっているのに気づきました。

草はこおどりをして喜びました。そのうちに太陽は、にこや

かなまる円かおい顔あたまうえで、頭の上をのぞきました。

「お日ひさま、私わたしはどれほど、あなたをお待まちしたかしれません。」
と、草くさはいいました。

「ああ、そうだろう。俺おれは、休やすまずにやってきたのだが、それでもどんなにおまえに、待まち遠とほしかつたかしのれない。」と、太陽たいようは、やさしく、草くさをなぐさめました。

その日ひから、草くさは太陽たいようの光ひかりを受けて、めきめきと成せい長ちよういたしました。一月ひとつきばかりの間に、どんなに草くさは大きおおくなつたでしょう。そして、枝えだものびて、つぼみもつけて、いまにも花はなを咲さこうとしたのであります。

そのとき、太陽たいようは、ふたたび屋根やねのあちらに隠かくれようとしま

した。草は、日のかげつたのに驚いて、太陽を仰いで、

「お日さま、また、どこへかいつてしまわれるのでございますか。」と、目をみはつていいました。

すると、太陽はいつに変わらぬ、にこやかな顔をして、

「もうおまえは、それでだいじょうぶだ。りっぱに花が咲いて、実を結ぶことができる。まだ北の方に、俺を待っているものがた くさんいる。」と、太陽はいいました。

「だが私は、あなたにお別れするのが悲しくてなりません。」と、草はいいました。

「そんなに悲しまなくてもいい。俺は南に帰るときに、もう一度おまえを見るだろう。」と、太陽は答えました。

その後、草ははたして、りっぱな花を咲きました。脊も、もつと高くのびて、青木よりも高くなりました。そして、葉もたくさんにしげりました。草は、内心大いに安堵していたのであります。もう、このくらい大きくなれば、太陽にすがるなくともいい、青木が冬の間に我慢をしていたように、私も我慢のできないこととはなれないと思いました。

「青木の木さん、あなたはどんな花をお咲きなのですか。」と、草は、黙っている青木の木に問いました。しかし、憂鬱な青木は、やはり黙っていました。

こんなに陰気な生活をして、なにがおもしろいのだろうと、草は青木のことを思いました。青木には、みつばちもあぶも、ち

ようも訪ねてきませんでした。それにひきかえて、草には、朝から晩まで、ちようや、あぶや、みつばちが訪ねてきました。

「ほんとうに、あなたは美しい。」といって、彼らは草をほめたたえていました。

草は昔のことをすっかり忘れてしまって、夢を見るような気持ちでその日を送っていました。やがて、夏も末に近づくと、太陽はふたたび草の上に現れました。

「もう俺は南へ帰る。おまえともこれがお名残だ。」と、太陽は、いつになく悲しそうな顔をしていました。

けれど草は、そんなに悲しいとも思いませんでした。青木の木より、俺は高いと心の中で誇っていたからです。しかし、太陽

が^{みなみ}南へ去^さってしま^うと、まもなく、草^{くさ}は枯^かれてしま^いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年11月

※表題は底本では、「小《ちい》さな草《くさ》と太陽《たいよ
う》」となっています。

入力：ぷろぼの青空作業員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空作業員チーム校正班

2011年11月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな草と太陽

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>